

第14回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画2

オラトリオ《ベルシャザル》

演奏会批評 (安田和信氏)

『読売新聞』2017年1月19日夕刊



写真・青柳聡

評

ヘンデル オラトリオ「ベルシャザル」

(ヘンデル・フェスティバル・ジャパン)

ヘンデル・フェスティバル・ジャパンは2003年以来、年に1、2回程度のペースでこの作曲家の大規模な声楽曲を上演することを活動の柱としてきた。この度の第14回公演で大作オラトリオ「ベルシャザル」を取り上げた。紀元前6世紀、ペルシャ軍に攻められたバビロニア王ベルシャザルがユダヤの神を挑発すると、彼の背後の壁に謎の文字が書かれる。それは王国滅亡の預言であり、彼は預言通りに戦死する。

ヘンデルがこの有名な物語のために作り上げた音楽は非常に素晴らしいものであり、今回の公演は上演機会の

課題残しつつ 上演自体功績

少なさが不当と知らしめるに足る水準にとりあえずはあった。とりわけ管弦楽(キヤノンズ・コンサート室内管)は全体の基礎を安定させる役割をしっかりと担っていた。オラトリオ作品で要をなす合唱(同室内合唱団)は約20名の精鋭部隊で、やや力強さに欠けたとはいえず(特にソプラノ)、メリハリのあるアンサンブルが各場面の状況を巧みに伝えていた。

独唱陣は古楽でも知られるベテランが担当。総じて堂々たる歌唱を披露してくれたが、アリアによっては技術的な困難を完全に克服できていなかったり、役柄の性格を重視し過ぎて充実した声の確保がままならなかったりする場面が散見されたのは惜しい。

課題を残しつつも、この傑作を日本で本格的に上演した功績は決して小さくない。指揮を執った三澤寿喜の、ヘンデル研究者としての情熱の賜物であろう。

(音楽評論家 安田和信)

—9日、東京・築地、浜離宮朝日ホール。